

聖書箇所

7 こうして、ふたりの目は開かれ、自分たちが裸であることを知った。そこで彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちのために腰の覆いを作った。

8 そよ風の吹くころ、彼らは、神である主が園を歩き回られる音を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて、園の木の間に身を隠した。

9 神である主は、人に呼びかけ、彼に言われた。「あなたはどこにいるのか。」

導入

私にはノンクリスチャンの親友が一人いるのですが、大学時代、彼に神様のことを知って欲しくて聖書をプレゼントしたことがありました。私は彼に聖書を渡しながら、“これは神様の愛が記されているんだ。ぜひ読んでほしい。”と伝えたのです。しばらくしてから、彼に尋ねてみました。聖書読んでる？って。そしたら彼は、読み始めたんだけど、創世記だけ読んでやめちゃったよ。って、言うのです。え？何で？って、思わず聞き返しました。聖書を渡した時に喜んでくれていたし、彼の性格から考えても、途中で飽きたからやめるということは考えられなかったからです。そんな私に彼は答えてくれました。だって、聖書を読んでいくと。神様って何考えてるのか本当に全くわからなくなるんだよ。私は彼が言ったこの言葉を一生忘れられないでしょう。なぜなら、私もそのように感じたことが多いからです。皆さんもこんなこと考えたことないでしょうか。聖書を読みながらなぜ？という疑問が尽きないことはありませんでしたか？しかも、どこを探しても神様の思い、神様のみこころについて詳しく、わかりやすく、端的に記されている箇所を見つけることはできない。そんなことを思ったことはないでしょうか。

神様は私たちを愛してくださっているといます。だから、聖書を与えてくださったとも。救い主イエス・キリストが与えられたことは揺るぎない神様の愛の証しであるということが出来るでしょう。しかし、私たちの歩みの中でその愛を感じるものの何と難しいことでしょうか。私の親友が言っていたように、創世記だけ見ても、神様のみこころを知ることの難しさを感じずにはいられません。主の御心が私たちを愛していると言うのであれば、なぜ樂園から追放したのか。なぜ人に罰をくだされるのか。なぜ今の私たちには苦しみや悲しみが尽きないのか。そんな思いを抱いている方は、私を始め、きっと多いことでしょう。では、私たちはどのようにして主のみこころを知ることができるのでしょうか。どのようにして、神様のくださった聖書を見ていけばいいのでしょうか。今日はそのことについて皆さんとともに考える時間を持ちたいと願っています。

本文1：人の目でみこころを見る

7 こうして、ふたりの目は開かれ、自分たちが裸であることを知った。そこで彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちのために腰の覆いを作った。

8 そよ風の吹くころ、彼らは、神である主が園を歩き回られる音を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて、園の木の間に身を隠した。

まず、主のみこころを知ることの難しさについて考えてみましょう。かつて人は神様によって特別に造られた存在でした。天地を創造された神様は、そのすべてをことばを持って行われました。光、あれ。という言葉をもって神様は創造の御業を始められたのです。神は仰せられたという表現は、創世記1章に繰り返し出てくる表現になりますが、ここに表されているのは創造の重要な骨組みです。つまり、創造には何の媒介も必要なく、何の素材も必要もなく、ただ神様のみことばによってのみ行われたということです。みことばによって光が造られ、みことばによって大空が造られ、みことばによって海が造られ、みことばによって植物が造られ、みことばによって太陽と星が造られ、みことばによって生き物が造られたのです。しかし、人は違います。アダムはどう造られたか。土地のちりを集めて形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれたことによって、生きるものとなりました。その妻エバはどうでしょう。アダムのあばら骨から形造られましたね。人はその造られた時から特別だったと言えるのです。さらには何一つ不自由のない楽園で暮らすようにされました。生きがいとも言える仕事も与えられました。神様の造られた美しい世界を管理する権限も与えられました。ここまでが創世記1章2章の内容です。いかに神様が人を愛してくださったかを知ることができますね。神様が人を愛されていると言うことは、世界の初めから変わりがないのです。

しかし、人は罪を知ることになります。蛇に唆され、神様のようにになりたいと言う欲望によって、です。罪というと私たちは犯罪を思い浮かべがちですが、聖書の語る罪は、少し違います。聖書の語る罪とは、人が神様から離れることを意味します。善悪の知識の木の実によって、人は罪を知りました。その後、彼らは何をしたのでしょうか。罪を知った人はまずいちじく葉をつづり合わせた腰の覆いを作りました。腰の覆いと聞くと、私たちは蓑のようなものを考えてしまいますが、原語から解釈しますと、これはほとんどベルトのようなものであったと言います。つまり、ほとんど何も隠せていないものなのです。では、なぜ彼らはそのようなものを作ったのか。神様と自分を隔てるものが必要だったからです。罪を知り、罪が入ってしまった自分は、もう神様の前にそのまま出ることはできない。神様と何も隔てるものがない状態が耐えられない。身を避けずにはいられない。罪によって彼らは神様から離れます。神様との隔てを作ることを望んだのです。たとえそれが、どんなに細く、弱いものであったとしても。さらには、神様から身を隠しました。神様から隠れる。神様から離れる。罪ある人間の行動です。罪は神様から人を遠ざけるのです。

神様の愛に変わりはありません。しかし、人は神様との隔たりを作ってしまったのです。罪によって。だから、人の目で、人の思いで、人の心で、主のみこころを求めることはできないのです。離れ、隠れてしまうからです。主のみこころを隠すのは神様ではありません。人の罪です。罪ある私たちは、主のみこころを求める時に、自分の罪を忘れてはならないのです。罪ある人間が主のみこころを知ることが難しいのはある意味、当たり前であると言えるでしょう。

本文2：主のみこころを探りながら

9 神である主は、人に呼びかけ、彼に言われた。「あなたはどこにいるのか。」

では、神様はそんな罪ある人をどのように扱っておられるのでしょうか。あなたはどこにいるのか。この一言にすべてが集約されているように思えるのです。神様は、神様との隔てを作ってしまった人になぜこのように呼びかけたのでしょうか。全知全能の神様が、人が少し隠れたくらいで彼らを見失うなんてことはありません。彼らの居場所を知ってなお、神様は語りかけておられます。あなたはどこにいるのか。この問いかけは、神様と人との関係におけるものであると言えます。彼らが罪を知ったという結果よりも、彼らの心、彼らの状態、神様の前に作ってしまった隔たりを問題とされたのです。神様から離れてしまった人という存在。神様は今彼らに問いかけられます。あなたはどこにいるのか。問いかけは、応答があることを前提に語られるものです。神様は今、それでもなお人に語りかけられるのです。罪を知ってしまったとしても彼らを手放されるわけでは、決してないのです。創世記3：21

21 神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作って彼らに着せられた。

人は罪によって神の園に住むことができない存在となりました。墮落によって人は樂園を追放されたのです。ですが、神様はそんな人のために皮の衣を作られました。いちじく葉の覆いとは比べものにならないほど彼らを守ってくれたことでしょう。皮はどのようにして手に入れることができるでしょう。動物を殺さなければ手に入れることはできません。神様は罪ある人のために血を流されたのです。人がたとえ罪ある者となったとしても、神様は愛を注いでくださる方です。樂園からの追放は神様との断絶ではありません。罪を嫌われる神様は、それでも人との繋がりを諦めることはなかったのです。創世記4：3～4

3 しばらく時が過ぎて、カインは大地の実りを主へのささげ物として持って来た。

4 アベルもまた、自分の羊の初子の中から、肥えたものを持って来た。主はアベルとそのささげ物に目を留められた。

人類最初の礼拝のことが記されています。礼拝は神様と人との関係によって行われるものです。聖書によると、人と神の関係は創世記1章から始まったことがわかります。しかし、人が神様を礼拝することは4章から始まっているのです。神様に創造されたアダムとエバが祝福のうちに楽園で暮らしている記録が2章であり、罪によって追放される記録が3章です。2章と3章の間にどれほどの時間が過ぎていたのか明記されていないので知る由もありませんが、人が楽園で神様と共に過ごしていた時には礼拝をささげることにはなかったのです。いや、必要なかったと言えるでしょう。つまり、礼拝の起源は人が罪を犯し、神様から離れたことによるのです。罪ある人間にこそ礼拝が必要であるということになります。罪は人を神様から離れるようにします。どのような手段を用いても、神様に近づかないようにするのが罪の目的だからです。その罪が人にあるからこそ、神様の御前に出ていく礼拝が必要となったのです。楽園にいた時に人が神様を礼拝する必要がなかったのはなぜか。常に神様と共にいたからに他なりません。礼拝は罪ある人間が神様を覚え、神様の御前に出ることから始まったのです。

礼拝の場に出ることを許されているということは、神様がその人を礼拝の場に招いてくださったということになります。私たちは神様の守りと導きがなくては、神様の御前に出ることさえできないからです。神様は罪を憎む方です。それでも罪ある人間を神様は招いてくださいました。神様の前に出てきなさいと言ってくださいます。神様はそれでも人に出会うことを望まれるのです。

ここに、主のみこころがあらわれているのではないのでしょうか。人には罪がある。それでもなお、主のみこころは人に注がれている。主の愛は、導きは、守りは、決して私たちを離れることがないのです。

本文3：みこころを求める

そう考えるとここで一つの矛盾が生じるように感じます。罪ある人間はみこころを知ることは難しい。でも神様は今もなお、愛を注いでくださり、私たちから離れることはない。じゃあ、何で、私たちの信仰生活においてみこころがわからなくなるという悩みがあるのだ、ということです。

私は信仰生活において、また、聖書を読むにあたって、忘れてはならない大前提が二つあると思っています。それは、私たちの歩みのすべてに神様の御計画があるということと、神様は祝福を与えたいと願ってやまない方であるということです。私たちの信仰の歩みすべてにおいて、偶然なんでもものは一つもありません。断じてないのです。すべてのことが神様の御計画によって行われることです。聖書の登場人物たち一人一人の上にも神様の御計画がありました。私たちの信仰の祖先であるアブラハムには、祝福の計画が。兄弟に売られてしまったヨセフには、飢饉から世界を救うための御計画が。苦しみに喘ぐイスラエルの民には奴隷からの解放の御計画が。想像を絶するほどの苦しみの中で叫ぶヨブには回復の御計画が。救いを待ち望む民には、救い主イエス・キリストを送

るという御計画が。使徒たちには大宣教命令というみことばを宣べ伝える者としての御計画が。人の人生には必ず神様の御計画があります。そして、それは今を生きる私たちにも同じことが言えます。主を信じる者には必ず、私のための御計画があるのです。

では、その御計画は何のためのものか。私に恵みを与えるためのものに他なりません。 **マタイ 7：7～11**

7 求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。

8 だれでも、求める者は受け、探す者は見出し、たたく者には開かれます。

9 あなたがたのうちのだれが、自分の子がパンを求めているのに石を与えるでしょうか。

10 魚を求めているのに、蛇を与えるでしょうか。

11 このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っているのです。それならなおのこと、天におられるあなたがたの父は、ご自分に求める者たちに、良いものを与えてくださらないことがあるでしょうか。

神様の祝福を与えたいとのみこころは、罪によって墮落し、樂園を追われてもなお続いています。私たちの救い主は御自身を地上に送られた神様が良いものをくださる方であると、ひとり子さえ惜しまない方が、私たちに祝福を与えないわけがないと証しされています。人類の歴史の始まりから、今に至るまで、そして、これからも神様は人を愛し、祝福を与えることを望んでおられるのです。

この大前提を持って、主のみこころについて考えてみましょう。罪ある私たちが主のみこころを知る方法がないのか。この隔たりはもう覆すことができないのか。そう諦めてしまいそうになることもあるでしょう。だから、みことばがわからないのだ、と。しかし、私たち一人ひとりに御計画を持っておられ、私たちに恵みを与えたいと願っておられる神様が、そのみこころを示されないなんてことがあるでしょうか。 **マタイ 7：7**

7 求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。

この聖書箇所を見るたびに私はいつも宝探しゲームを思い浮かべます。宝探しゲームでは様々な宝が隠されています。宝探しゲームはその宝を見つけることを目的としていますが、当然、隠された宝は探しやすい場所にあることもあれば、気合を入れて探さないと見つからない場合もあります。そして、見つけやすかった宝よりも探しづらいところにあった宝の方がより良いものであることが多いでしょう。求め、探した者がより多くの、より豊かな宝を手にするというわ

けです。

主は言われます。求めれば、与えられる、と。逆に求めなければ与えられることはない。探さなくては、見つけれない。たたかなければ、開かれぬ。神様は祝福を与えることを望んでおられますが、その祝福を求め、探し、たたく者こそが、余すところなくその祝福にあずかることができる者となります。主のみこころを求め、探し、叩く者には、神様は必ず主のみこころが与えられるのです、

結論

ヨハネ 15：14～15 のみことばをお読みいたします。

14 わたしが命じることを行ふなら、あなたがたはわたしの友です。

15 わたしはもう、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべなら主人が何をするのか知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。父から聞いたことをすべて、あなたがたには知らせたからです。

わたしが命じることを行ふなら、あなたがたはわたしの友です。イエス様が命じられることは何でしょうか。イエス様が父から聞いたこととはどこにあるのでしょうか。みことばです。みことばなんです。私たちが主のみこころを知る方法は、私たちに与えられているみことばなんです。私たちの心に罪が宿り続けていけば、神様の隔たりを持ち続けているのであれば、決して主の御心を知ることにはできません。しかし、私たちの心にみことばが宿っていれば、主のみこころを求める者としての歩みをする事ができるのです。

みことばに傷ついたことがあるでしょうか。当たり前です。神様から離れよう離れようとする罪の性質を持つ私たちが、みことばに傷つかない方がおかしいですね。みことばに責められたことがあるでしょうか。お祝いしませんか？私たちの心の戸口に立って、主がみことばを持って叩いておられるからです。みことばを悟って、主のみこころを知る者として歩むように。私たちに祝福を与えたいと願ってやまない主が私たちに手を差し伸べておられる証拠です。

誰もが祝福を望むでしょう。幸せに生きることを望むでしょう。今の悩みが、痛みが、苦しみが消え去ることを願うでしょう。神様のみこころが私に示されることを望むでしょう。みことばなんです。主のみこころに気づき、自分がありえないほどの恵みを受けていることを思い起こすためにはみことばが必要なんです。みことばに親しみ、しゅのみこころを知る私たちでありたいと強く願います。